

一三九四九

混物 こんぶつ

一三九五〇

大は小と異にして。而して有は資と同じからず。然りと雖も。

一三九五二

成る者は應ずる有り、

一三九五三

資る者は給する有り、故に

一三九五四

之を有に資りて歸を一にす、

一三九五五

之を各に成して物を立す、

一三九五六

之を一有に資る、

一三九五七

之を各體に成す、

一三九五八―五九

各物各天地は。終に各其の勢を張る。蓋し

一三九六〇

持中なる者は。濁境なり。其の天は則ち氣は恬に風は動く、

一三九六一

其の地は則ち山は峙ち水は俯す、

一三九六二―六三

其の易は則ち燥火なり、其の會は則ち水溼なり、而して雲雨は上に出没す、

一三九六四

動植は下に生化す、

一三九六五

雲雨は濁中に淨し、

一三九六六

動植は濁中に穢す、

一三九六七

淨ければ則ち運爲。握歩の跡を没す、

一三九六八

穢すれば則ち網縷。交字の態を露す、蓋し

一三九六九

動植なる者は。天地間の小物なり。然りと雖も。

* 一三九七〇 我は動中の一物と爲りて。神中の一氣を具し。艸木に依り、天地に立す。

* 一三九七一 故に眇たる一氣物。天地を人に於て開き。大物と勢を張る。

一三九七二 植は則ち冷止無意なり、

一三九七三 動は則ち濇動有意なり、夫れ

一三九七四 物は天地を有す、

一三九七五 氣は神本を具す、

一三九七六 動は天物を成す、

一三九七七 植は地物を成す、

一三九七八 動は神氣を専らにす、

一三九七九 植は本氣を専らにす、

一三九八〇 一八一 能く本氣を専らにして、而して地物を成す、故に植、其の神は則ち無意なり、

一三九八二 能く神氣を専らにして、而して地物を成す、故に動、其の體は則ち地に著く、

* 一三九八三 一八四 能く神氣を専らにして、而して地物を成す、故に動、其の神は則ち有意なり、其の體は則ち天に居る、故に

一三九八五 植體は、則ち内を實にして以て止り、冷を地の寒に資る、

一三九八六 動體は、則ち内を虚にして以て動き、濇を燥の煦に資る、蓋し

一三九八七 大物の有は、上下を以て、而して中外に居る、故に

一三九八八 小物の資は、本末を以て、而して上下に居る、然り而して

一三九九〇 植は、本を下にし末を上す、

(I 526a)

一三九九一 動は、本を上にし末を下にす、

一三九九二 一に於て有せらる、

一三九九三 二に於て反す、故に

一三九九四―九五 本氣を以て生を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、而れども

一三九九六 冷止は我れ之を惡む、
溫動は我れ之を好む、

一三九九七―九八 神氣を以て靈を爲すは、則ち彼此同なりと雖も、
有意は我に運す、
無意は彼に運す、

一三九九九 華榮し實種するは、則ち彼此同なりと雖も、

一四〇〇〇 彼は質實を以て、物を外に於て取り、生を下體に於て養う、
實を上頭に於て結ぶ、

一四〇〇一 此は氣虚を以て、物を内に於て取り、生を上竅に於て養う、
子を下體に於て生ず、

一四〇〇二 生を爲し命を爲すは。則ち彼此同なりと雖も。而れども

一四〇〇三 彼は根より生して、而して命は根に在り、

一四〇〇四 此は首より生して、而して命は首に在り、惟だ

一四〇〇五 有意を以て立する者は、有意に事有り、

一四〇〇六 無意を以て立する者は、無意に事無し、是に於て。

一四〇〇七 無意は、有意の事に混然たり、

一四〇〇八 有意は、有意の事に混然たり、

一四〇〇九 有意は、有意の事に粲然たり、

一四〇一〇 有意は、有意の事に粲然たり、

一四〇一一 有意は、有意の事に粲然たり、

(PB 190)

- 一四〇一二
- 一四〇一三
- 一四〇一四
- 一四〇一五
- 一四〇一六
- 一四〇一七
- 一四〇一八
- 一四〇一九
- 一四〇二〇
- 一四〇二一
- 一四〇二二
- 一四〇二三
- 一四〇二四
- 一四〇二五
- 一四〇二六
- 一四〇二七
- 一四〇二八
- 一四〇二九
- 一四〇三〇

既已に粲然たり。視聽聞味。思慮知辨は。

其の物を有す、

其の事を有す、

偏なる者より之を觀れば、彼に無き者は我に有り、

全なる者より之を觀れば、彼に混有する者は、

此に粲立す、是の故に。

身を有する者は。本末内外を有す。

動は外を實にし、植は内を實にす、而して

動は上を本にし、植は下を本にす、

本末内外。動植の同じき所なり。

有意は向う所有り。向背は前後を爲す。

前後有れば。必ず左右を有す。故に

前後左右は。有意に分つ、

無意に混ず、

有意は。視聽聞味。知覺好惡を用う。故に

耳目鼻舌。意智情慾は。有意に分つ、

無意に混ず、是れ

多少の有無の對を成す所なり。

未だ混粲の分を知らず。多少の對に於て泥む。

- 一四〇三一 大物は、 塊塊に居りて、 而して衰衰に従う、 故に
- 一四〇三二 小も、 亦た天地に居りて、 而して節序に従う、 然り而して
- * 一四〇三三 植は、 華葉を配として、 而して子苗に繼ぐ、
- * 一四〇三四 動は、 牝牡を配として、 而して子母に繼ぐ、
- 一四〇三五 大物は、 氣 其の物を運し、 神 其の事を爲す、 故に
- 一四〇三六 小も、 亦た氣 其の物を運し、 神 其の事を爲す、 然り而して
- 一四〇三七 植は、 止りて無意に運爲す、
- 一四〇三八 動は、 動きて有意に運爲す、 蓋し
- 一四〇三九 大なる者は、 機體象質なり、 諸を風恬水陸に縮す、
- 一四〇四〇 動植は、 則ち其の風恬水陸に居る、 諸を彩聲氣性に醸す、 故に
- 一四〇四一 虚を天と爲す、 其の彩聲氣性を用す、
- 一四〇四二 實を地と爲す、
- 一四〇四三 風は轉旋す、
- 一四〇四四 恬は持立す、
- 一四〇四五 質は水を湛う、
- 一四〇四六 燥は陸に充つ、 故に風恬水陸なる者は、 機體象質より成る、
- 一四〇四七 清は天を爲す、
- 一四〇四八―四九
- 一四〇五〇

(PB 191)

- 一四〇五一
- 一四〇五二
- 一四〇五三
- 一四〇五四
- * 一四〇五五
- 一四〇五六
- 一四〇五七
- 一四〇五八
- 一四〇五九
- 一四〇六〇
- 一四〇六一
- 一四〇六二
- 一四〇六三
- 一四〇六四
- 一四〇六五
- 一四〇六六
- 一四〇六七
- 一四〇六八
- 一四〇六九
- 一四〇七〇
- 一四〇七一
- 一四〇七二
- 一四〇七三
- 一四〇七四

濁は地を爲す、
 静は彩を呈す、
 動は聲を激す、
 熱は氣を發す、
 潤は性を收む、故に彩聲氣性なる者は、色性氣性より醸す、
 是を以て。風恬水陸の境は。則ち彩聲氣性の充つる所なり。故に
 合して之を言えは、動植は、動靜燥溼にして物を爲す、
 彩聲氣性にして用を爲す、
 分ちて之を言えは、動體は動きて溼なり、能く彩聲氣性を發す、
 植體は止りて燥なり、能く彩聲氣性を收む、蓋し
 動は。質を取りて内を養なうの時、其の性を舌に於て覺る、之を味と謂う、
 氣を喻いて内に通ずるの時、其の氣を鼻に於て覺る、之を臭と謂う、
 物に於ては、則ち彩聲氣性なり、
 我に於ては、則ち彩聲臭味なり、蓋し一なり。
 大は、則ち成らざる莫く、立せざる莫し、而して
 小は、則ち大に資りて成る、物に依りて立つ、
 資れば則ち大に應ず、
 依れば則ち與に感ず、故に
 大物も、亦た本根精英を有す、

(PB 192)

一四〇七五 小物も、亦た本根精英を有す、

一四〇七六 本を天と爲す、

一四〇七七 根を地と爲す、

一四〇七八 精は会を成す、

一四〇七九 華は易を成す、

一四〇八一 故に天なる者は、

一四〇八二 地なる者は、

一四〇八三 精なる者は、

一四〇八四 華なる者は、

一四〇八五 天は地中に没す、

一四〇八六 地は天中に露す、

一四〇八七 根を爲す者は止る、

一四〇八八 本を爲す者は動く、

一四〇八九 故に天通地塞は本を爲す、

一四〇九〇 天虚地實は根を爲す、

一四〇九一 精は動止を隠す、

一四〇九二 英は發收を見す、

一四〇九三 蓋し

一四〇九四 神物の體は、

一四〇九五 神靈は事を運し、

一四〇九六 本根は物に體するを用す、

一四〇九七 是に於て。

一四〇九八 本氣は物を成す、

一四〇九九

(I 527a)

故に氣は本根精英を藏す、
物は天地会易を露す、

一四〇九七
 一四〇九八
 一四〇九九
 一四一〇〇
 一四一〇一
 一四一〇二
 一四一〇三
 一四一〇四
 一四一〇五
 一四一〇六
 一四一〇七
 一四一〇八
 一四一〇九
 一四一一〇
 一四一一一
 一四一一二
 一四一一三
 一四一一四
 一四一一五

神氣は事を爲す、
 事物なる者は露す、
 本神なる者は没す、
 天地は則ち本氣の成る所なり、
 天神は則ち神氣の成る所なり、
 經通緯塞、
 動轉靜持、
 天虛地實、
 易發會收、
 此に於てせざる者莫し。故に
 大物は 天地なり、
 小物は 動植なり、
 大物は神本を有せば、則ち
 小物も亦た神本を有す、
 本氣は、則ち彼此同名なり、
 神氣は、則ち彼此神と謂う、
 此に意と謂う、
 物 異なるを以て、而して氣
 氣 異なるを以て、而して名
 別なり、

- 一四二一六 一 剖するを以て、而して氣應ず、
- 一四二一七 氣應ずるを以て、而して名通ず、
- 一四二一八 動を有意と爲す、神氣の物なり、
- 一四二一九 植を無意と爲す、本氣の物なり、而して
- 一四二二〇 神本は相い有し。動植は全成す。
- 一四二二一 成具は。則ち天神なり、
- 一四二二二 天地なり、
- 一四二二三 天は則ち定常なり、
- 一四二二四 神は則ち變化なり、
- 一四二二五 變化の地、神靈感運成る、
- 一四二二六 天は則ち乾明なり、
- 一四二二七 地は則ち潤暗なり、
- 一四二二八 潤暗の處は。水燥土石を成す。故に
- 一四二二九 物は芸芸然たりと雖も。亦た惟だ一動一植のみ。
- 一四二三〇 動植は。風恬の中に居る、
- 一四三三一 水土の中に立つ、
- 一四三三二 神靈の神を成す、
- 一四三三三 感運の氣を用う、故に
- 一四三四一三五 物は水燥土石に資る、以て氣液の生、骨肉の身を爲す、

(PB 193)

- 一四一三六
- 一四一三七
- 一四一三八
- 一四一三九
- 一四一四〇
- 一四一四一
- 一四一四二
- 一四一四三
- 一四一四四
- 一四一四五
- 一四一四六
- 一四一四七
- 一四一四八
- 一四一四九
- 一四一五〇
- 一四一五一
- 一四一五二
- 一四一五三
- 一四一五四

潤暗結實。水燥は天に居る、
 土石は地を結ぶ
 水燥は則ち雲雨に之く、
 土石は則ち動植に之く、
 動植は。生を同じくして物を反す。故に
 彼に根幹と曰う、
 此に身首と曰う、
 動植は物を分つと雖も。而も同じく之を有す。故に
 水燥土石は。我に於て得て。而して氣液骨肉なり。
 植は骨を欠けば、則ち剛を肉に於て寓す、
 血を欠けば、則ち潤を氣に於て寄す、
 此は溫動有意なり、
 彼は冷止無意なり、是に於て。
 其の有意の器は。彼に無くして我に有り。蓋し夫れ。
 人の身を爲すは。氣液骨肉なり。
 氣は溫動を分つ、
 液は膏血を分つ、
 肉は臟腑を分つ、
 骨は筋骨を分つ、

(1 527b)

- 一四一五五
- 一四一五六
- 一四一五七
- 一四一五八
- 一四一五九
- 一四一六〇
- 一四一六一
- 一四一六二
- 一四一六三
- 一四一六四
- 一四一六五
- 一四一六六
- 一四一六七
- 一四一六八
- 一四一六九
- 一四一七〇
- 一四一七一
- 一四一七二
- 一四一七三

膏こうに和わして皮ひ 外そとに成なる、
 血ちに和わして肉にく 内うちに成なる、
 皮かわは能よく物ものを裏つつむ、
 肉にくは能よく神しんを畜たくわう 是この故ゆえに。
 府ふなる者ものは、物ものを納おさむるの名なにして、皮ひの別べつ名めいを爲なす、
 藏ぞうなる者ものは、氣きを藏ぞうするの名なにして、肉にくの別べつ名めいを爲なす、
 臟ぞうは上じょう體たいを爲なす、
 腑ふは下げ體たいを爲なす、
 上じょう下げの體たい成なりて、
 神しん本ほんの氣き 分わかる、
 氣きは神しん靈れい感かん運うんに資とりて、以もつて心しん性せいの意い、爲い技ぎの爲なを爲なす、
 體たいの分ぶんは、天てんなり、地ちなり、
 人じんなる者ものは、地ち中ちゆうの一いち小しょう物ぶつなり、故ゆえに
 水すい燥そう土ど石せきは、我われに得えて、而しかして氣き液えき骨こつ肉にくを爲なす、
 氣きの分ぶんは、天てんなり、神しんなり、而しかして
 意いなる者ものは、神しん中ちゆうの一いち小しょう氣きなり、故ゆえに
 神しん靈れい感かん運うんは、我われに得えて、而しかして神しん靈れい爲い技ぎを爲なす、
 神しん靈れいは、意い智ちの心しんを爲なす、
 感かん運うんは、情じょう慾よくの性せいを爲なす、

(PB 194)

一四一七四

相あ和わして運用うんようの爲い、

一四一七五

言動げんどうの技ぎを爲なす、

一四一七六

意智いち情慾じょうよく。合がっして之これを言いえ、則すなわち意智いちと無なく、情慾じょうよくと無なく、

一四一七七

自然じぜんにして我われに有うするは、則すなわち性せいなり、

一四一七八

運うん爲いして事じに用ようするは、則すなわち心しんなり、

一四一七九

分わかちて之これを言いえ、情慾じょうよくの感應かんおう、自然じぜんに於おいて發はつするは、則すなわち性せいなり、

一四一八〇

意智いちの運うん爲い、然しから使しむるに用ようするは、則すなわち心しんなり、然しかり而して

一四一八一

無意むいは、則すなわち精靈せいれい自然じぜんにして、而しかして感應かんおう然しから使しむ、

一四一八二

有意ういは、則すなわち感應かんおう自然じぜんに發はつして、而しかして知運ちうん然しから使しむ、

一四一八三

天人てんじんの別べつなり。然しかり而して無意むい無作むさくの神しんは、往來おうらい分合ぶんごうを爲なす、

一四一八四

有意うい有作ゆうさくの神しんは、運うん用よう言動げんどうを爲なす、

一四一八五

運うん用ようなる者ものは、心しんに於おいて爲なす、故ゆえに爲いと曰いう、

一四一八六

言動げんどうなる者ものは、外そとに於おいて發はつす、故ゆえに技ぎと曰いう、

一四一八七

然しかり而して彩聲さいせい氣性きせいは、物ぶつに具ぐす、

一四一八八

好惡こうお知覺ちかくは、氣きに具ぐす、

一四一八九

大だいは外そとより保ほす、

一四一九〇

小しょうは内うちより保ほす、

一四一九一

大だいは則すなわち内うちを質しつにす、

一四一九二

小しょうは則すなわち外そとを質しつにす、

(I 528a)

- 一四一九三
- 一四一九四
- 一四一九五
- 一四一九六
- 一四一九七
- 一四一九八
- 一四一九九
- 一四二〇〇
- 一四二〇一
- 一四二〇二
- 一四二〇三
- 一四二〇四
- 一四二〇五
- 一四二〇六
- 一四二〇七
- 一四二〇八
- 一四二〇九
- 一四二一〇
- 一四二一一

動植なる者は。小中の偶なり。

意を用うれば、則ち氣液骨肉を分つ

意を舍つれば、則ち氣液骨肉を合す

内を虚にすれば、則ち養を内より取る

内を實にすれば、則ち養を外より取る 故に

植は彩聲臭味を呈す

動は彩聲臭味を用す

成れば則ち自から保し自から運す

依れば則ち或いは給し或いは資る 故に

小物は。成るや則ち各自に保運す

立つや則ち互いに相い給資す

心性の意、

爲技の爲、

動は以て之を分つ

植は以て之を合す

分たざれば則ち之を混有す

合せざれば則ち之を榮立す

人は則ち物中の一物なり

意は則ち神中の一氣なり

- 一四二二二
- 一四二二三
- 一四二二四
- 一四二二五
- 一四二二六
- 一四二二七
- 一四二二八
- 一四二二九
- 一四二三〇
- 一四二三一
- 一四二三二
- 一四二三三
- 一四二三四
- 一四二三五
- 一四二三六
- 一四二三七
- 一四二三八
- 一四二三九
- 一四二三〇

人は己を有して以て其の境を開く。是に於て

己に非ざる者を併せて。己と之と勢を張る。故に

其の遇する所は皆な物にして。而して往く所は皆な天なり。

物なる者は。天地に得て。而して物を成する者なり。

物は成りて而して天地と勢を張る。是に於て。

天と神は並び立つ。

人と物は相い居る。故に

彼も能く没露す、

此も亦た没露す、

露中は、則ち天地なり、我に得て、乃ち身生なり、

没中は、則ち神本なり、我に得て、亦た神本なり、

天に於いて資る、

與に依りて立つ、故に

動植は天に同居し地に立つ。

水燥を以つて、能く其の物を宅す、

日影に従いて、能く其の氣を行る

氣液骨肉、

心性爲技、

精より之を觀れば、彼此同く有り、

(PB 189)

(PB 196)



- 一四二三一
- 一四二三二
- 一四二三三
- 一四二三四
- 一四二三五
- 一四二三六
- 一四二三七
- 一四二三八
- 一四二三九
- 一四二四〇
- 一四二四一
- 一四二四二
- 一四二四三
- 一四二四四
- 一四二四五
- 一四二四六
- 一四二四七
- 一四二四八
- 一四二四九

一四二三一 麤より之を觀れば、彼此相い隔つ、故に
 一四二三二 植の跡を混有に没するも、亦た其の氣は其の中に在り、
 一四二三三 動の跡を榮立に露するも、亦た其の氣は彼の外に在らず、故に
 一四二三四 我の立するや。同じく混榮の氣體を有す。

一四二三五 神氣は體を混用し、本氣は體を榮成す、
 一四二三六 生體は神を榮有し、身體は本を混成す、
 一四二三七 體は則ち軀なり、
 一四二三八 軀は身生を以て立す、而して生は則ち氣液なり、身は則ち骨肉なり、
 一四二三九 氣なる者、一溫一動なり、而して溫は營衛を有す、動は息脈を有す、
 一四二四〇 液なる者、一血一膏なり、而して血は津血を有す、膏は脂髓を有す、
 一四二四一 肉なる者、一臟一腑なり、而して臟腑は各おの内外を分つ、
 一四二四二 骨なる者、一筋一骨なり、而して筋骨も亦た内外を分つ、
 一四二四三 混氣は則ち神なり、神は意爲を以て成る、而して
 一四二四四 意は則ち心性なり、
 一四二四五 爲は則ち爲技なり、

(I 528b)

一四二四六 地の水燥土石は、乃ち人の氣液骨肉なり、故に
 一四二四七 水の氣を爲すや。氣の質に之くなり。
 一四二四八 質に之きて未だ質を定めず。是に於てか。
 一四二四九 水は猶お氣のごとくなり。是を以て。

(PB 197)

一四二五〇

氣は則ち温なり、

一四二五一

液は則ち潤なり、故に

一四二五二

其の生くるや、之を摸すれば則ち温、之を傷ければ則ち血、

一四二五三

其の死するや、之を摸して温を得ず、之を傷けて血を見ず、是に於て。

一四二五四

觀る。氣の物を爲すや、死すれば則ち之を亡す、

一四二五五

物の物を爲すや、死すと雖も之を留むるを、故に

一四二五六

動植を合して之を言え、神氣は爲技なり、

一四二五七

動植を分ちて之を言え、植に神氣爲技と爲す、

一四二五八

動に心性爲技と爲す、蓋し

一四二五九

神の物を爲すは。物に主として。而して物を用うる者なり。

一四二六〇

物に主として。而して體を爲さざるなり。

一四二六一

體を爲さざると雖も而も物を没中に成す。

一四二六二

爲技とは。惟だ其の發して事を爲す者なり。

一四二六三

心なる者は。一意一智なり、而して意に思慮有り、

一四二六四

性なる者は。一情一慾なり、而して情に愛憎有り、

一四二六五

智に知辨有り、

一四二六六

慾に欲惡有り、

一四二六七

爲なる者は。一運一爲なり、而して運に運行有り、

一四二七八

爲に立持有り、

一四二七二―七三 技なる者は、一聲一技なり、而して聲に和激有り、
 一四二七四 技に守禦有り、

一四二七五 氣は、我の燥なり、

一四二七六 液は、我の水なり、

一四二七七 肉は、我の土なり、

一四二七八 骨は、我の石なり、

一四二七九 神情は、我に於ては心性を爲す、

一四二八〇 造化は、我に於ては爲技を爲す、

一四二八一 天地の我と同じき所なり。而して

一四二八二 彼なる者は、地質を内に結びて、天氣を外に轉ず、

一四二八三 我なる者は、骨肉を外に護して、溫動を内に保す、是れ

一四二八四 天地の我と反する所なり。然り而して

一四二八五 氣に溫動有り、

一四二八六 液に膏血有り、

一四二八七 肉に臟腑有り、

一四二八八 骨に筋骨有り、

一四二八九 心に意智有り、

一四二九〇 性に情慾有り、

一四二九一 爲に運爲有り、

(神を性に訂正傍記。)

(PB 198)

- 一四二九二
- 一四二九三
- 一四二九四
- 一四二九五
- 一四二九六
- 一四二九七
- 一四二九八
- 一四二九九
- 一四三〇〇
- 一四三〇一
- 一四三〇二
- 一四三〇三
- 一四三〇四
- 一四三〇五
- 一四三〇六
- 一四三〇七
- 一四三〇八
- 一四三〇九
- 一四三一〇

技ぎに言動げんどう有り、而しかして

愛憎あいぞう欲惡よくあくなる者は、好惡こうおなり

思慮しりよ知辨ちべんなる者は、知覺ちかくなり

物ものに好惡こうお知覺ちかくを有うせざる者もの無し。蓋けだし

人じんのだいぶん大分だいぶんは。意いと身しんとなり。而しかして

身しんは生せいと偶ぐうす、

意いは爲いと對つひす、

身生しんせいなる者は、動どうの天地てんちなり

意爲いなる者は、動どうの性才せいさいなり、蓋けだし

天地てんちの條理じょうりは。質しつは必かならず冷止れいしす、

植質しょくしつは冷れいにして、氣きは必かならず濫動おんどうす、而しかして

動質どうしつの濫おんなる者は、何なんぞ。

質しつに動止どうしの異有いあればなり。

性情せいじょう爲技いぎなる者は、動植どうしょくの共ともに有うする所ところなり。

惟ただ意いに於おいて相あい有う無むするのみ。

植しょくは地ちに就つきて豎立じゅりつす、地ちの類るいなり、故ゆえに意いの神しんを冷止れいしに於おいて舍すつ、

動どうは天てんに在ありて横行おうこうす、天てんの類るいなり、故ゆえに意いの神しんを濫動おんどうに於おいて寓ぐうす、

濫動おんどうなる者は、生せいなり、氣血きけつは之これに繫つなぐ、

(I 529a)

- 一四三一
- 一四三二
- 一四三三
- 一四三四
- 一四三二五
- 一四三二六
- 一四三二七
- 一四三二八
- 一四三二九
- 一四三二〇
- 一四三二一
- 一四三二二
- 一四三二三
- 一四三二四
- 一四三二五
- 一四三二六
- 一四三二七
- 一四三二八
- 一四三二九

形體なる者は、身なり、骨肉は之を成す、

質體なる者は、冷止の物なり。

神を有して此の中に動く。是れ

其の體の溫なる所なり。蓋し

天地なる者は、偏寒偏熱を以てして成る者なり。然り而して

動なる者は、溫動の氣を以て。冷止の質に和す。

和合は以て活す、

乖離は以て化す、

化すれば則ち溫去り冷生ず、以て質の自然なるを觀る、

活すれば則ち冷去り溫釀す、以て氣の使然なるを知る、

氣は溫にして動す、

血は溫にして活す、故に

血の體に充つるは。存すれば則ち滾滾として充つ、

死すれば則ち倏忽として失す、

是れに由りて之を觀るに。

血なる者は、活動の氣化なるや。明けし。故に

血なる者は、氣の化なり。

氣を得て骨肉の實質と對す。是に於てか。

骨肉氣血は親を爲す。以て能く好患知覺す。此の故に

- 一四三三〇
- 一四三三一
- 一四三三二
- 一四三三三
- 一四三三四
- 一四三三五
- 一四三三六
- 一四三三七
- 一四三三八
- 一四三三九
- 一四三四〇
- 一四三四一
- 一四三四二
- 一四三四三
- 一四三四四
- 一四三四五
- 一四三四六
- 一四三四七
- 一四三四八

感應の運爲する所は。性に於て有る者は、
 神に於て之れ有り、是の故に。

意の有無は動植に於て分ると雖も。而も
 動中も亦た此の有無を平分す。故に

生の好悪知覺は、無意に於てす、
 心の好悪知覺は、有意に於てす、

同じく是れ神爲なり。同じく是れ神爲なりと雖も。而も其の爲は則ち反す。
 反に由りて同を觀す、

同に由りて反を觀す、其の態は識る可し。
 粗ぼ其の槩を擧げて以て之を言わんに。

勞逸を知り、睡覺を知り、痛苦を知るは、皆な無意の神爲なり、
 適否を知り、蔽悟を知り、憂樂を知るは、皆な有意の神爲なり、
 是を以て。

好悪知覺。有意無意。相い應ず。是を以て。

生に痛有れば、則ち心も亦た悼有り、
 生に痒有れば、則ち心も亦た痒有り、

痛は呻吟を爲す、
 悼は哭泣を爲す、

身 痒ければ則ち爪搔く、
 心 痒ければ則ち齒切る、

(1 529b)

- 一四三四九
- 一四三五〇
- 一四三五一
- 一四三五二
- 一四三五三
- 一四三五四
- 一四三五五
- 一四三五六
- 一四三五七
- 一四三五八
- 一四三五九
- 一四三六〇
- 一四三六一
- 一四三六二
- 一四三六三
- 一四三六四
- 一四三六五
- 一四三六六
- 一四三六七

身み 麻ますれば則すなわち左右さゆうの運動うんどうする所ところ無し、
 心こころ 癡おろかなれば則すなわち進退しんたいの運うん爲いする所ところ無し、
 人の衾いんき肌もを摸もせば、則すなわち肌はだは羞はじらいて口くちは笑わらう、
 人の衾いんじ事を訶あばけば、則すなわち身みは羞はじらいて心こころは笑わらう、
 人の肌肉きにくを割さけば、則すなわち肉にく傷いたんで氣痛きいたむ、
 人の親戚しんせきを割さけば、則すなわち情傷じょういたんで心痛こころいたむ、
 氣きは鬱うつして病やみ、達たつして快かいす、
 心しんは鬱うつして悶もだえ、達たつして安あんず、
 氣きを病やめば則すなわち身みを廢はいす、
 知ちを病やめば則すなわち徳とくを壞こわす、
 是これ乃すなわち天人てんじんの應おうなり。然しかり而して
 情慾じょうよくは、有意ういの感應かんおうなり、
 意智いちちは、有意ういの知運ちうんなり、
 體たいは耳目鼻舌もくびぜつ、手足衾乳しゆそくいんにゅうの文ぶんを有うす、而しかして其その爲いは萬變ばんへんす、
 心しんは意智情慾いちじじょうよく、運用營施うんようえいしの事じを有うす、而しかして其その運うんは錯綜さくそうす、
 爲いは虚實守禦きよじつしゆぎよを爲なす、而しかして愛憎欲惡あいじょうよくあくは、其その間かんに成なる、
 意いは思慮知辨しりよちべんを運うんす、而しかして善惡是非ぜんあくぜひは、其その中ちゆうに出いづ、
 榮體さんたいは則すなわち文ぶんなり、體たいは臟腑ぞうふを以もつて成なる、而しかして
 臟ぞうは則すなわち内臟外臟ないぞうがいぞう、腑ふは則すなわち内腑外腑ないふがいふなり、

(PB 200)

- 一四三六八 内臓は上下を分ちて、上は則ち心肺、下は則ち肝腎なり、
- 一四三六九 外臓は上下を分ちて、上は則ち耳目、下は則ち鼻舌なり、
- 一四三七〇 内腑は上下を分ちて、上は則ち咽胃、下は則ち腸腑なり、
- 一四三七一 外腑は上下を分ちて、上は則ち会乳、下は則ち手足なり、
- 一四三七二 獸は必ず身を俯す。身を俯すれば則ち横たわる。
- 一四三七三 横たわれれば則ち手足は下に在りて。会乳は上に在り。
- 一四三七四 人は身を豎にするを以て。其の體を異にするのみ。
- 一四三七五 粲氣は、則ち體の文に従うの氣なり、
- 一四三七六―七七 其の氣は本神を以て成る、而して神は則ち内神外神なり、
- 一四三七八 本は則ち内本外本なり、
- 一四三七九 内神は精麤を用う、而して精は以て保運す、麤は以て化持す、
- 一四三八〇 外神は精麤を用う、而して精は以て視聽す、麤は以て聞味す、
- 一四三八一 内本は精麤を用う、而して精は以て納畜す、麤は以て收送す、
- 一四三八二 外本は精麤を用う、而して精は以て交字す、麤は以て舞踏す、
- 一四三八三 混氣物なる者は、體なり、諸を大物に資り、以て己の有と爲す、
- 一四三八四 粲氣物なる者は、文なり、諸を身生に得て、以て己の神を用う、
- 一四三八五 植も亦た多種なり、
- 一四三八六 動も亦た多種なり、
- 一四三八七 資給は同じからずして、

(PB 201)

(I 530a)

- 一四三八八
- 一四三八九
- 一四三九〇
- 一四三九一
- 一四三九二
- 一四三九三
- 一四三九四
- 一四三九五
- 一四三九六
- 一四三九七
- 一四三九八
- 一四三九九
- 一四四〇〇
- 一四四〇一
- 一四四〇二
- 一四四〇三
- 一四四〇四
- 一四四〇五
- 一四四〇六

通塞は各おの異なるなり、然りと雖も。
 動中。意智の巧を極め、

我が境よりして。而して有意を推す、
 造化の機を弄する者は、人。之を最と爲す。故に

無意を察す

混資は己を成す、

祭立は佗を用う、

混體は、則ち本根の身生なり、内外臟腑の文を祭立す、

混氣は、則ち精英の神爲なり、内外本神の文を祭立す、

天地天神なる者は、我を成するの氣なり、

彩聲臭味なる者は、我が交る所の氣なり、而して

氣は豈に啻に此の四のみならんや、

寒熱溼燥は、膚に覺る、

善惡是非は、心に覺る、

輕重は捧うるに覺る、

強弱は持するに覺る、

堅軟は摸するに覺る、

毒藥は養するに覺る、

配嗣器地なる者は、我を立するの質なり、

- 一四四〇七
- 一四四〇八
- 一四四〇九
- 一四四一〇
- 一四四一一
- 一四四一二
- 一四四一三
- 一四四一四
- 一四四一五
- 一四四一六
- 一四四一七
- 一四四一八
- 一四四一九
- 一四四二〇
- 一四四二一
- 一四四二二
- 一四四二三
- 一四四二四
- 一四四二五

水穀便溺なる者は、我を寄するの質なり、而して

質は豈に此の四のみならんや、

絺綌裘帛は、寒暑に切なり、

門牆干戈は、守禦に切なり、

薬餌は、疾病に切なり、

枕席は、臥寐に切なり、惟だ

彼の氣質の各おの八なる者は、動の至切なる者なるのみ。此の故に。

魚に耳無し。鳥に腕無し。

艸木は配偶に假らず。

魚介は手足に假らず。

瞽者は色に假らず。

聾者は聲に假らず。

精英は能く本根に發す、故に

本根は能く精英を收む、

天は以て己を成す、故に

神は以て己を用す、故に

本根なる所の者は、胚胎に兆し、黄壤を貫く、

精英なる所の者は、後れて榮し先んじて謝す、

正ければ則ち治る、書は神に夜は昏し、故に

(PB 202)

- 一四四二六
- 一四四二七
- 一四四二八
- 一四四二九
- 一四四三〇
- 一四四三一
- 一四四三二
- 一四四三三
- 一四四三四
- 一四四三五
- 一四四三六
- 一四四三七
- 一四四三八
- 一四四三九
- 一四四四〇
- 一四四四一
- 一四四四二
- 一四四四三
- 一四四四四

病めば 則ち亂る、是を以て

神の軀に居る、之れを生と爲す、

軀の神を喪う、之れを死と爲す、

氣は無體を以て動く、

質は有質を以て止る、

氣聚まれば則ち體結ぶ、

體解くれば則ち氣散ず、

暴露する者は、體は必ず早壊す、

蟄藏する者は、體は必ず久持す、

心なる者は、氣の華なり、

身なる者は、氣の根なり、

氣なる者は、動き易く佚し難し、

體なる者は、靜を好み勞を惡む、

神は軀を役す、之れを覺と爲す、

軀は神を役す、之れを夢と爲す、

視聽なる者は、耳目の氣なり、

舞踏なる者は、手足の氣なり、

好惡思辨なる者は、神氣なり、

氣は本根を爲す、

佗無し、氣の散じ易きを以てなり、
佗無し、氣の洩れざるを以てなり、

故に心は宜しく恬澹を以て養うべし、
故に身は宜しく動を以て作養すべし、

而して

- 一四四四一
- 一四四四二
- 一四四四三
- 一四四四四
- 一四四四五
- 一四四五六
- 一四四五七
- 一四四五八
- 一四四五九
- 一四四六〇
- 一四四六一
- 一四四六二
- 一四四六三

心は英華を爲す。

心は固に一身の主なり。

四肢百骸。皆な其の役を爲す。是の故に。

心は能く使令す、

氣は能く命を聽けば、則ち

耳目は視聽す、

手足は舞踏す、

心は令すと雖も。而も氣聽かざれば。則ち聾盲癱瘓。癡狂妄動す。

心は尊しと雖も。而も親自すること能わず、

氣は卑しと雖も。而も用を作すこと己に由る、

老壯病健は。惟だ氣の從なり。是を以て。則ち視聽云爲、自から正し、覺の事なり、

氣心を役すれば、則ち神は耳目を視聽に於て役せず、

反つて視聽する所の氣に於て役せらる、

心は手脚を舞踏に於て役せず、

反つて舞踏する所の氣に於て役せらる、夢の事なり、故に

正有り。邪有り。感有り。背有り。前事を記する有り。

將來を知る有り。思う所に由る有り。思わざる所を得る有り。

愛す可く。惡む可く。驚く可く。楽しむ可く。其の状は千萬と雖も。

(PB 203)

- 一四四六四
- 一四四六五
- 一四四六六
- 一四四六七
- 一四四六八
- 一四四六九
- 一四四七〇
- 一四四七一
- 一四四七二
- 一四四七三
- 一四四七四
- 一四四七五
- 一四四七六
- 一四四七七
- 一四四七八
- 一四四七九
- 一四四八〇
- 一四四八一
- 一四四八二

惟だ心の氣に於て役せらるるに由るのみ。

本根は困しめば則ち精華は病む

精華は病めば則ち本根は苦しむ

憂悲思慮なる者は心の病なり

痛痒饑渴なる者は氣の病なり

心勞せば則ち氣困しむ

氣病めば則ち心苦しむ 是を以て。

魑魅は神を毒す

疾病は心を亂す 則ち

恍惚は夢覺を分たず。

徒らに視て徒らに聽き。徒らに舞いて徒らに踏むのみ。

神明 主と爲し。號令 嚴肅なれば。則ち 肢體は各おの命を待ちて。而して皆な用を一心に統ぶるなり。

生の身に充つる 之れを壯と爲す

身の生を散ずる 之れを老と爲す

生の神に旺する 之れを寐と爲す

神の生に旺する 之れを寤と爲す

氣は。來れば則ち充つ

往けば則ち散ず、而して

(I 531a)

- 一四四八三
- 一四四八四
- 一四四八五
- 一四四八六
- 一四四八七
- 一四四八八
- 一四四八九
- 一四四九〇
- 一四四九一
- 一四四九二
- 一四四九三
- 一四四九四
- 一四四九五
- 一四四九六
- 一四四九七
- 一四四九八
- 一四四九九
- 一四五〇〇
- 一四五〇一

寤寐なる者は、神本の更るがわる政を爲すなり、
 夢覺なる者は、神本の更るがわる役を爲すなり、
 故に神は其の權を執れば則ち正し、

其の權を失えば則ち狂す、

生の本根を爲すは、猶お國の衆を以て基と爲るがごときなり、
 心の英華を爲すは、猶お國の君を以て主と爲るがごときなり、
 朝廷なる者は、禮樂文物の在る所、
 聰明才徳の居る所、號令控掣の由る所なり、
 郊野なる者は、禮樂文物に於て足らず、
 聰明才徳に於て乏し、亦た號令控掣の權を有せず、
 前後左右、仰ぎて之を上をに於て待つ者なり、故に

上は控掣の權を執りて、以て下を馭し、
 下は號令の命を奉じて、以て上に聽けば、則ち能く太平を致す、
 上は聰明の徳を失して、而して下を監すること能わず、
 下は控掣の權を竊んで、以て上を犯せば、則ち終に擾亂を致す、
 氣なる者は、心の基なり、
 心なる者は、氣の主なり、
 心は號令控掣し、以て能く氣を役使す、
 氣は動靜云爲し、皆な命を待ちて爲す、是の故に。

夫れ

(PB 204)

- 一四五〇二
- 一四五〇三
- 一四五〇四
- 一四五〇五
- 一四五〇六
- 一四五〇七
- 一四五〇八
- 一四五〇九
- 一四五一〇
- 一四五一一
- 一四五一二
- 一四五一三
- 一四五一四
- 一四五一五
- 一四五一六
- 一四五一七
- 一四五一八
- 一四五一九
- 一四五二〇

氣は苟くも痛痒恐懼する有れば、
 心は苟くも感激憤發する有れば、
 是れ主客の事なり。夫れ

視聽舞蹈なる者は、
 氣の爲す所なり、

耳目の視聽を役し、
 手脚の舞蹈を役する者は、
 心の爲す所なり、

心令し氣聽けば、
 則ち 視て 其の色を辨じ、

聽きて其の聲を辨じ、

舞いて其の節に中り、

踏みて其の地を得るは、
 人の正なり、

心は之を令するを知らざれば、
 氣は徒らに其の用を爲して、

視て 其の色を辨ぜず、

聽きて其の聲を辨ぜず、

云いて其の言を擇ばず、

爲して其の事を擇ばず、

是れ之を狂と爲す、

上下は序を有し、
 治安は謀る可し、

位序は未だ分れずんば、
 烏んぞ治を謂うを得ん、

下 苟くも上に於て聽かずんば、
 則ち衆は各おの其の用を爲す、

- 一四五二一
- 一四五二二
- 一四五二三
- 一四五二四
- 一四五二五
- 一四五二六
- 一四五二七
- 一四五二八
- 一四五二九
- 一四五三〇
- 一四五三一
- 一四五三二
- 一四五三三
- 一四五三四
- 一四五三五
- 一四五三六
- 一四五三七
- 一四五三八
- 一四五三九

國に於ては、則ち亂を爲し亡を爲す、
 人に於ては、則ち癩を爲し狂を爲す、
 主 權柄を専らにすれば、則ち衆 役使に於て困しむ、

國に於ては、則ち弊を爲し危を爲す、
 人に於ては、則ち病を爲し死を爲す、

其の精を守れば則ち眞なり、
 其の主を喪えば則ち妄なり、

神なる者は、心の精爽なり。是を以て。

目を病めば、則ち大虚に蚊虻を見る、

耳を病めば、則ち漠中に蟬雀を聞く、夫れ

病邪は元と内に在り。而して聲色は妄を外に於て爲す。

心は精爽を失せざれば、則ち聲色の眞妄を辨ず、

心は精爽を失すれば、則ち必ず蚊虻を撲し、蟬雀を驅る、

病まざる者は、妄狀を視聽に於て認めず、

病む者は、則ち妄狀を視聽に於て認む、故に

神正しくして、而して衆と同じく視聽す、是れ其の眞なり、

神病んで、而して佗と視聽を別にす、是れ其の妄なり、

物は已に象形を具す。孰れか目に於て逃れん。何となれば則ち

面前の色、目に於て印し、目の神、接して物を鑑す、

(1 531b)

(PB 205)

- 一四五四〇
- 一四五四一
- 一四五四二
- 一四五四三
- 一四五四四
- 一四五四五
- 一四五四六
- 一四五四七
- 一四五四八
- 一四五四九
- 一四五五〇
- 一四五五一
- 一四五五二
- 一四五五三
- 一四五五四
- 一四五五五
- 一四五五六
- 一四五五七
- 一四五五八

左右の聲、耳に於て感じ、耳の神、受けて聲を辨ず、
色は目に印せず、

聲は耳に感ぜず、而して色と聲とを成す者は。

豈に外に在る者ならんや。故に

心は邪の爲に役せられ。其の視聽舉動をして。

物に對するが如くならしむる者は。實に妄状のみ。

何ぞ眼華。耳鳴。睡語。夢影と異ならん。

故に生は其の可に適すれば則ち和す、其の否に遇えば則ち勞す、

天地なる者は、一寒一熱なり、而して

我が身は、則ち寒熱に和して溫、戻れば則ち偏寒偏熱を生ず、

天地なる者は、一燥一溼なり、而して

我が身は、則ち燥溼を合して中、偏れば則ち偏燥偏溼を成す、

此の故に寒暑を衝く、

雨雪を冒す、

饑飽に過ぐ、

嗜好に淫す、

力の及ばざる所に役す、

智の能わざる所に勞す、

彼の勞苦の事。皆な職として此れ之に由る。

- 一四五五九
- 一四五六〇
- 一四五六一
- 一四五六二
- 一四五六三
- 一四五六四
- 一四五六五
- 一四五六六
- 一四五六七
- 一四五六八
- 一四五六九
- 一四五七〇
- 一四五七一
- 一四五七二
- 一四五七三
- 一四五七四
- 一四五七五
- 一四五七六
- 一四五七七

其の養を得れば則ち健なり、
 其の毒に遇えば則ち病なり、

食色器貨。淫すれば則ち人を毒す。

寒熱風溼。忤らえば則ち人を毒す。

水火金石。触るれば則ち人を毒す。

諂佞便戾。親しめば則ち人を毒す。

故に意は爲を具すれば則ち性なり、

爲の意を能するは則ち才なり、

思なる者は、意の物に於て運するなり、

業なる者は、物の意に於て運するなり、
 是に於て。

交接の間。意は順忤を有す、

態は治亂を爲す、
 是の故に。

人は天地の給する所に資る、

萬物の立する所に依る、
 故に

大物は神を給す、
 我は資りて意と爲す、

大物は爲を給す、
 我は資りて爲と爲す、

意は則ち心性なり。

性なる者は、神の給する所なり、

心なる者は、靈の給する所なり、
 故に

(I 532a)

(PB 206)

- 一四五七八
- 一四五七九
- 一四五八〇
- 一四五八一
- 一四五八二
- 一四五八三
- 一四五八四
- 一四五八五
- 一四五八六
- 一四五八七
- 一四五八八
- 一四五八九
- 一四五九〇
- 一四五九一
- 一四五九二
- 一四五九三
- 一四五九四
- 一四五九五
- 一四五九六

情慾なる者は、神の物と交接する所、感應の態なり、
 意智なる者は、靈の物と交接する所、運營の態なり、
 爲なる者は、神爲の自ら用うる所なり、
 技なる者は、靈爲の佗を用うる所なり、故に
 運爲なる者は、氣體を運行立持するなり、
 聲技なる者は、氣體を和激守禦するなり、夫れ
 物は天地の間に竝立して。而して
 彼此は交接を爲す。是の故に。
 情は外に感ず、而して愛憎は動く、
 慾は内に應ず、而して欲惡を出す、
 情なる者は、心の氣に感ずるなり、
 慾なる者は、氣の心に感ずるなり、是を以て。
 心なる者は内に在りて、而して用を外に於て爲す、
 體なる者は外に在りて、而して事を内に於て用す、
 我の愛憎は、佗の美醜吉凶よりす、
 酸鼻の隠、甘心の忍、
 毎に之を内に於て快にして、而して之を外に於て伸ばさんと思う、
 他の聲色服飾は、我の耳目口體の爲にして求む、
 輿馬粉黛の美、絲竹羞饌の具、
 物は牽けば則ち愛憎に外に於て従う、
 身は動き而して色食を内に於て求む、

(PB 207)

- 一四六〇〇
- 一四六〇一
- 一四六〇二
- 一四六〇三
- 一四六〇四
- 一四六〇五
- 一四六〇六
- 一四六〇七
- 一四六〇八
- 一四六〇九
- 一四六一〇
- 一四六一一
- 一四六一二
- 一四六一三
- 一四六一四
- 一四六一五

常つねに之これを前まえに於おいて備そなえて、而しかして之これを内うちに於おいて恣ほしいまにせんと欲ほつす、
 内うちに求もとむれば則すなわち外そとは之これに從したがう、
 外そとに從したがえれば則すなわち内うちは之これを求もとむ、

意いは運うんして思し慮りよは神しんなり、

智ちは營えいして知し辨べんは靈れいなり、

愛あい憎ぞうの施しする所ところ、親しん疏そを致いたす、

欲よく惡あくの接せつする所ところ、悅えつ怨おんを動うごかす、

人ひとの美びを愛あいすれば則すなわち羨うらやむ、

己おのれの美びを愛あいすれば則すなわち矜ほこる、

己おのれの惡あくを惡にくめば則すなわち羞はづ、

人ひとの美びを惡にくめば則すなわち妬ねたむ、

思しに順じゆん忤ご有りて、而しかして喜き怒ど應おうず、

慮りよは肅しゆく舒じゆ有りて、而しかして憂ゆう歡かん成なる、

智ちは吉きつ凶きようを解とく、而しかして哀あい樂らく感かんず、

辨べんは得とく失しつを分わかつ、而しかして悔かい咎きゆう生しやうず、
 且かつ

情じやうは。注そそぎて慕したう、

背そむきて戮いとう、

合ごうを欲ほつして求もとむ、

分ぶんを惡にくみて惜おしむ、

(1 532b)

- 一四六一六
- 一四六一七
- 一四六一八
- 一四六一九
- 一四六二〇
- 一四六二一
- 一四六二二
- 一四六二三
- 一四六二四
- 一四六二五
- 一四六二六
- 一四六二七
- 一四六二八
- 一四六二九
- 一四六三〇
- 一四六三一
- 一四六三二
- 一四六三三
- 一四六三四

意は、鬱して 愠なり、暢して驕なり、
 智は、素にして慤なり、飾つて詐なり、
 思の存亡する所、記忘有り、
 智の動止する所、信疑有り、
 辨を事物に於て用うれば、則ち美醜を分つ、
 道を進退に於て考うれば、則ち榮辱を成す、
 神は。劫かす所有れば則ち驚く、
 危ぶむ所有れば則ち畏る、
 痛む 所有れば則ち泣く、
 弄する所有れば則ち笑う、
 病む 所有れば則ち苦む、
 役する所有れば則ち勞す、
 運は以て氣體を運行す、
 爲は以て氣體を立持す、
 音聲を發して、而して虚實を見す、
 爲の精を用うる、一は則ち聲を發す、
 一は則ち技を發す、
 技に發する者は、守禦に爲す、
 聲に發する者は、和激に在り、
 此の故に。

(PB 208)



- 一四六三五
- 一四六三六
- 一四六三七
- 一四六三八
- 一四六三九
- 一四六四〇
- 一四六四一
- 一四六四二
- 一四六四三
- 一四六四四
- 一四六四五
- 一四六四六
- 一四六四七
- 一四六四八
- 一四六四九
- 一四六五〇
- 一四六五一
- 一四六五二
- 一四六五三

守禦の技は、
 或いは齒角に於てす、
 或いは距鬚に於てす、
 或いは首尾に於てす、
 而して人は則ち専ら手足に於てす、
 和激の發は、
 笑泣喜怒を各おの發す、
 或いは音聲を羽脰に於て發する者有り、
 或いは音聲を假らざる者有り、
 人なる者は。意爲に長ずる者なり。故に
 聲音を弄して、
 而して言語の文を爲す、
 手足を役して、
 而して千百の事業を爲す、
 故に
 人は。意を適否に於て運す、
 而して善惡岐す、
 智を當否に於て用す、
 而して是非作る、
 情を口舌に於て吐して、
 而して虚實成る、
 慾を手足に於て施して、
 而して守禦起る、
 是を以て。
 物の己に分るる。己に切にして佗に疏す。
 切なる者を守らんと欲す。故に害する者を禦ぐ。故に
 學と曰う、
 禮と曰う、
 仁と曰う、
 義と曰う、

- 一四六五四
- 一四六五五
- 一四六五六
- 一四六五七一五八
- 一四六五九
- 一四六六〇
- 一四六六一
- 一四六六二
- 一四六六三
- 一四六六四
- 一四六六五
- 一四六六六一六七
- 一四六六八
- 一四六六九
- 一四六七〇
- 一四六七一一七二
- 一四六七三―七四
- 一四六七五
- 一四六七六

業ぎようと曰いう、
 務むと曰いう、
 藥餌やくじと曰いう、
 飲食いんじよくと曰いう、
 衣服いふくと曰いう、
 牆屋しょうおくと曰いう、
 軍旅ぐんりよと曰いう、
 城郭じょうかくと曰いう、
 戒かいと曰いう、
 禁きんと曰いう、
 禱とうと曰いう、
 刑けいと曰いう、
 守禦しゅぎよを務つとむるの間かん。物ものを弄ろうするの工こうは。
 一正いちせい一誕いちたん。
 一護いちご一訐いちげつ。虚實きょじつの間かんなり。
 正せいなる者ものは、直ちよくなり、質しつなり、護ごする者ものは、
 誕たんなる者ものは、詐さなり、誣ふなり、訐げつなる者ものは、
 寓ぐうする者ものは、言げんに虚きょすと雖いへども、而しかも意いに實じつす、
 訐げつなる者ものは、事じに實じつすと雖いへども、而しかも意いに虚きょす、
 而しかして千せん萬まんなる者ものは、皆みな守しゆの事じなり、
 而しかして千せん萬まんなる者ものは、皆みな禦ぎよの事じなり、
 以もつて褒ほうし、以もつて覆おほう、
 以もつて犯おかし、以もつて害がいす、
 而しかして千せん萬まんなり、而しかして千せん萬まんなり、
 故ゆゑに (U 533a)

- 一四六七七
- 一四六七八
- 一四六七九
- 一四六八〇
- 一四六八一
- 一四六八二
- 一四六八三
- 一四六八四
- 一四六八五
- 一四六八六
- 一四六八七
- 一四六八八
- 一四六八九
- 一四六九〇
- 一四六九一
- 一四六九二
- 一四六九三
- 一四六九四
- 一四六九五

或いは言に正うして、而して意に曲なり、
 或いは言に迂にして、而して事に敏なり、故に
 情を以て之を言え、一虚一實なり、

事を以て之を言え、虚實は共に可否なり、

動作を發して、而して守禦を爲す、

人と物と。同じく口舌手脚を具す、

同じく聲音營施を具す、

物の聲音營施は、自使混然たり、

人の聲音營施は、自使粲焉たり、

自使混然とは、何ぞや、

鳴けば則ち其の聲は自から發す、

動けば則ち其の技は自から露す、

自使粲焉とは、何ぞや、

泣笑は自から憂樂に於て發す、而して歌哭は轉折を以て分る、

舞踏は自から動作に於て成す、而して技巧は意匠に由て變ず、

有意の能。意匠を轉折して。神靈の妙を轉し。鼓舞の巧を弄す。是れ乃ち

人の獨り有する所にして。而して別に吼轉飛走の外に發す。

聲音は轉折して、而して事物は狀を無形に於て成す、之を言語と謂う、

之を咨嗟咏嘆して、而して歌曲を作る、之を序して律呂を爲す、

(PB 209)

- 一四六九六
- 一四六九七
- 一四六九八
- 一四六九九
- 一四七〇〇
- 一四七〇一
- 一四七〇二
- 一四七〇三
- 一四七〇四
- 一四七〇五
- 一四七〇六
- 一四七〇七
- 一四七〇八
- 一四七〇九
- 一四七一〇
- 一四七一一
- 一四七一二
- 一四七一三
- 一四七一四

技巧は經營して、而して事物は體を有形に於て成す、之を事業と謂う、
 之を文章修飾して、而して禮樂を爲す、

之を虚にして跡を爲す、
 之を實にして器を爲す、

聲を認めて書を爲す、
 型を摸して畫を爲す、

言語なる者は、意智情慾を聲音に於て轉ずる者なり、
 事業なる者は、意智情慾を技巧に於て舞する者なり、
 言語の道は、心に生して、而して聲に發す、

心に生して、而して聲に發する者は、虚も亦た狀を成す、
 實も亦た狀を成す、

或いは素を以て之を直にす、

或いは文を以て之を飾る、

或いは野を以て之を出だす、

或いは誕を以て之を欺く、

耳に受けて、而して心に辨ずる者は、

或いは以て之を信ず、

或いは以て之を疑う、

一四七一五

信疑の間に虚實して、而して言に成る者は、千萬なり、

(1533b)

一四七二六

動作の事は、心に發して、而して身に動く

一四七二七

我に出でて、而して彼に見る

一四七二八

心に發して、而して身に動く者は、以て能く守り、以て能く禦す

一四七二九

守や、以て身を修め、以て産を治す

一四七三〇

禦や、以て微を慎み、以て備を修む

一四七三一

我に出でて、而して彼に見る者は

一四七三二

或いは以て往く

一四七三三

或いは以て來る

一四七三四

往來の中に守禦して

一四七三五

好を出だし戎を興す

一四七二七

禍を締む福を致す

一四七二八

心性に機す、而して

一四七二九

言行に定む

一四七三〇

是に於て。文、以て其の用を具する。猶お人の府庫を設けて。

一四七三一

錢帛を置き。門戸を開きて。出入りを爲すがごとし。故に

一四七三二

肺は天氣を保し、肝は地氣を化し、心は其の神を運し、腎は其の天を持す、

一四七三三

咽は水穀を納め、胃は水穀を畜え、脬は其の淨を泌別し、腸は其の穢を送輸す、

耳目鼻舌は、彩聲臭味を通ず、

(PB 210)

- 一四七三四 会乳手足は、配嗣器地を用す、
- 一四七三五 粲氣は、則ち物に接するの氣なり、
- 一四七三六 粲體は、則ち意を用うるの器なり、是を以て。
- 一四七三七 神本の氣は、上下の體に居る、
- 一四七三八 精麤の氣は、内外の體を雜う、是に於て。
- 一四七三九 肺肝心腎、耳目鼻舌、保運化持、視聽聞味す、
- 一四七四〇 咽胃腸脬、手足会乳、納畜收送、舞踏交字す、
- 一四七四一 上體を臟と爲す、
- 一四七四二 下體を腑と爲す、而して臟腑は各おの内外を有す。
- 一四七四三 内臟、中は則ち心なり、端は則ち腎肺肝なり、
- 一四七四四 外臟、中は則ち舌なり、端は則ち鼻耳目なり、
- 一四七四五 内腑、中は則ち胃なり、端は則ち咽腸脬なり、
- 一四七四六 外腑、中は則ち会なり、端は則ち手足なり、
- 一四七四七 神氣は、神なり、
- 一四七四八 本氣は、天なり、而して
- 一四七四九 神本は各おの内外を有す。
- 一四七五〇 内神は、精以て神本の氣を運持す、
- 一四七五一 外神は、精以て天地の氣を保化す、
- 一四七五二 外神は、精以て聲色を祝聽す、

- 一四七五三
- 一四七五四
- 一四七五五
- 一四七五六
- 一四七五七
- 一四七五八
- 一四七五九
- 一四七六〇
- 一四七六一
- 一四七六二
- 一四七六三
- 一四七六四
- 一四七六五
- 一四七六六
- 一四七六七
- 一四七六八
- 一四七六九
- 一四七七〇
- 一四七七一

麩以て臭味を聞味す、

内本は、精以て水穀を納畜す、

麩以て便溺を收送す、

外本は、精以て配嗣に交字す、

麩以て器地に舞踏す、

混然たる體用は、以て物を合す、

粲然たる氣物は、以て神を開く、

鳥獸鱗甲。大抵は相い類す。惟だ

人は。則を天地に於て觀て、以て道を立つ、

爲を設施に於て開きて、以て禮を制す、

修は以て亂を防ぐ、

荒は以て治を擾す、是れ

物の無き所にして。而して人事の關鍵なり。夫れ

水陸なる者は。持中の兩天地なり。

堅軟の動植は。擾擾として其の間に並び立つ。

神爲變化。有無通塞。具に有る所を盡くすなり。蓋し

物の將に生ぜんとするや、其の氣は混混沌沌たり、惟だ

神は淳淳として、天地を其の中に於て存す、

其の既に化するや、其の物は汪洋洋洋たり、惟だ

(PB 211)

(I 534a)

一四七七二 氣は衰こんこんとして、其その物ものを天てん地ちに於おいて一いちにす。

一四七七三 生せいは。本ほん生せいを有うす、

一四七七四 餘よ生せいを有うす、

一四七七五 餘よ生せいは或あるは氣きを以もつて化かす、

一四七七六 本ほん生せいは必かならず形けいを以もつて傳つたう、

一四七七七 水すい陸りくの艸そう木もく鳥ちゆう獸じゆうは、之これを本ほん生せいと謂いう、

一四七七八 水すい陸りくの蟲ちゆう多た菌きん苔たいは、之これを餘よ生せいと謂いう、

一四七七九 本ほん生せいは、條じゆう理りの正せいを守まもる、

一四七八〇 餘よ生せいは、條じゆう理りの變へんを盡つくす、

一四七八一 本ほん生せいは、正せい中ちゆうに變へんを盡つくす、

一四七八二 餘よ生せいは、變へん中ちゆうに正せいを含ふくむ、

一四七八三 是こゝを以もつて。鳥ちゆう獸じゆうは正せい形けいにして、

一四七八四 是こゝを以もつて。人ひとは則すなわち豎じゆう立りつす、

一四七八五 獸けものは則すなわち横おう行こうす、

一四七八六 我われは則すなわち神しん靈れいを具ぐす、

一四七八七 物ものは則すなわち聰そう慧けいに乏とほし、

一四七八八 獸けものは則すなわち肉にく腎しんなり、

一四七八九 鳥とりは則すなわち骨こつ髒しなり、

一四七九〇 獸けものは食しょくし鳥とりは啄たくす。鼬いたちは喙すい魚うおは吞のむ。

而しかして鱗りん甲こうは其その變へんを盡つくす、
而しかして卉き蔓まんは其その變へんを盡つくす、

(PB 212)

- 一四七九二
- 一四七九三
- 一四七九四
- 一四七九五
- 一四七九六
- 一四七九七
- * 一四七九八
- * 一四七九九
- 一四八〇〇
- 一四八〇一
- 一四八〇二
- 一四八〇三
- 一四八〇四
- 一四八〇五
- 一四八〇六
- 一四八〇七
- 一四八〇八
- 一四八〇九
- 一四八一〇

獸けものは則すなわち食息しょくそくす、
 魚うおは則すなわち吞吐どんとす、
 鯨たこは腹ふくを以もつて頭とうの處しょに安やすんず、
 蛇へびは腹ふくを以もつて手足しゅそくの用ようを爲なす、
 象ぞうは鼻はなを以もつて指ゆびと爲なす、
 猿さるは足あしを以もつて手てと爲なす、
 馬うまは鼻はなを以もつて牛うしの舌したに代かう、
 牛うしは舌したを以もつて馬うまの鼻はなに代かう、
 鳥とりは寢ねるに方あたりて人ひとの坐すわるが如ごとし、
 人ひとは伏ふすに方あたりて魚うおの行いくに似にる、
 鳥とりは則すなわち尿にょう無なし、
 蟬せみは則すなわち尿しな無なし、
 牛馬ぎゆうばは力りきに勝まさる、
 猫犬びょうけんは捷しょうに勝まさる、
 鳥とりは手てを以もつて翼よくと爲なす、
 魚うおは鬣ひれを以もつて肢しに代かう、
 諸生しよせいは口こう塚とくの處しょを異ことにす、
 鯨たこは則すなわち口こう塚とくの處しょを一いちにす、
 人ひとは清潔せいけつを好このむ、

- 一四八一
- 一四八二
- 一四八三
- 一四八四
- 一四八五
- 一四八六
- 一四八七
- 一四八一八
- 一四八一九
- 一四八二〇
- 一四八二一
- 一四八二二
- 一四八二三
- 一四八二四
- 一四八二五
- 一四八二六
- 一四八二七
- 一四八二八
- 一四八二九

烏鳶うゑんは則ち臭穢しゅうわいを喜ぶよろこぶ、
 蝙蝠こうもりは倒懸とうけんす、
 螺なは則ち倒行とうこうす、
 鰕えびは後うしろに向いて跳ぬは、
 蟹かには旁かたわらに向いて行くい、
 諸動しよどうは、則ち内骨外肉ないこつがいにくなり、
 甲介こうかいは、則ち外骨内肉がいこつないにくなり、
 鳥とりの羽翼うよくは。則ち魚うおの鱗鬣りんりょうなり。
 牛馬ぎゅうばの脣舌しんぜつは。則ち獸けものの手指しゆしなり。
 鷗鷺おうろは能く水すいに著つく、
 人は則ち好このんで火ひを執とる、
 望潮しおまねきは頭あたまを没ぼつす、
 水母くらげは骨無こつなし、
 水魚すいぎよは瞑めいせず、
 土蟲どちゆうは息いきせず、
 蟻ありは髭ひげを以もつて視みる、
 魚うおは目めを以もつて聽きく、
 螻蛄とうこは豎口じゆこうなり、
 蚊虻ぶんぼうは長舌ちやうぜつなり、

(1534b)

- 一四八三〇
- 一四八三一
- 一四八三二
- 一四八三三
- 一四八三四
- 一四八三五
- 一四八三六
- 一四八三七
- * 一四八三八
- 一四八三九
- 一四八四〇
- 一四八四一―四二二
- 一四八四三
- 一四八四四
- 一四八四五
- 一四八四六
- 一四八四七
- 一四八四八
- 一四八四九

蜂は則ち満面皆な目なり、
 蜘蛛は則ち満身皆な腹なり、
 鸚鵡と河豚とは、 瞼 獣の如し、
 鯢魚と蟾蜍とは、 體 獣に似る、
 鸞鼠は則ち獸にして翅なり、
 鯪鯉は則ち鱗にして毛なり、
 龜は獸の如くして卵生す、
 鱷は鱗の類にして胎生す、
 蠶類は、 則ち卵にして蠶、 蠶にして蛹、 蛹にして蛾なり、
 蟾蜍は、 則ち胞にして蝌蚪、 蝌蚪にして手脚を生ず、
 禽獸は、 則ち専ら聲音を口に於て用う、
 羽蟲は、 則ち専ら聲音を羽に於て用う、 然り而して魚鼈は則ち聲音を用いること少なり。
 人の技に於る、 學んで後に成る、
 物の技に於る、 習わずして得る、
 牡蠣石蚶は、 含靈にして生を艸木に類す、
 石螺石蛤は、 動形にして體を土石に類す、
 苔蘇は枝葉を假らず、
 菌寓は全く艸木に異なれり、
 形の傳うる所。 牝牡は感應し。 胎を其の中に託す。

(PB 213)

- 一四八五〇 軀殼くかくは開析かいせきし。其その物もの。始はじめて成なる。
- 一四八五一 植しょくしの子しや、或あるいは肉にくを殼からにし、或あるいは皮かわを殼からにす、
- 一四八五二 動どうの子しや、或あるいは卵らんを殼からにし、或あるいは胞ほうを殼からにす、
- 一四八五三 殼からを繫かくるの處ところは。植しょくに之これを蒂へたと謂いう、
- 一四八五四 動どうに之これを臍へそと謂いう、
- 一四八五五 鱗りん比び相あい繼つぐの痕こんは。或あるいは亡ぼうし或あるいは存そんす。
- 一四八五六 葉は布しき花はな發はつし、種しゅ殼かくを其その中ちゆうに於おいて繫つなぐ、
- 一四八五七 牡ぼ感かんじ牝ひん應おうじ、子し胞ほうを其その中ちゆうに於おいて託たくす、故ゆえに
- 一四八五八 男だん女じょの情じようなる者ものは、發はつ生せいの感かんにして、而しかして
- 一四八五九 子し母ぼの愛あいなる者ものは、保ほ生せいの應おうなり、
- 一四八六〇 物ものの生せいは、之これを天てんに於おいて資とる、
- 一四八六一 物ものの養ようは、之これを物ものに於おいて取とる、故ゆえに
- 一四八六二 日にちは影えいを以もつて養やしなう、
- 一四八六三 燥そうは水すいを以もつて養やしなう、
- 一四八六四 己おのれは天てんを以もつて生しようず、
- 一四八六五 己おのれは天てんを以もつて死しす、
- 一四八六六 其その己すでに生しようじ未いまだ死しせざる。能よく持じして此この體たいを存そんす。
- 一四八六七 持じ存そんの間かん、生せい事じを有うす、是これ之これを養ようと曰いう、
- 一四八六八 養よう事じに反はんす、是これ之これを害がいと曰いう、

一四八六九

天は之を養うに氣を以てす、

(PB 214)

一四八七〇

地は之を養うに質を以てす、

一四八七一

天は之を害するに氣を以てす、

一四八七二

地は之を害するに物を以てす、

一四八七三

艸木は寒暑を得て、而して天に養わる、

一四八七四

水土を得て、而して地に養わる、

一四八七五

鳥獸は噓喩を得て、而して天に養わる、

一四八七六

飲食を得て、而して地に養わる、

一四八七七

氛疹瘴癘は、能く動植を氣に於て害す、

(I 535a)

一四八七八

水火金石は、能く動植を質に於て害す、

一四八七九

故に動植は生を天に於て得る、

一四八八〇

養を物に於て取る、

一四八八一

内實する者は、外より養う、

一四八八二

内虚する者は、内より養う、

一四八八三

同じく諸を氣質に取りて成る。

一四八八四

植は、無意にして止りて、天地の養を没爲に於て待つ、

一四八八五

動は、有意にして動きて、天地の養を有爲に於て作る、

蓋し

一四八八六

内實する者は、養を外に於て取る、

一四八八七

内虚する者は、養を内に於て取る、故に

- 一四八八八
- 一四八八九
- 一四八九〇
- 一四八九一
- 一四八九二
- 一四八九三
- 一四八九四
- 一四八九五
- 一四八九六
- 一四八九七
- 一四八九八
- 一四八九九
- 一四九〇〇
- 一四九〇一
- 一四九〇二
- 一四九〇三

彼の生を奪いて、

我が生に給す、是に於て

殺活の道有り。是の故に。

物の天は、動を殺して我の生を保する者有り、

植を殺して我の生を保する者有り、故に

保生の道は。彼を殺して我を保するに非ざる者莫し。惟だ

植なる者は無意なり、故に惨怛の憾無し、

動なる者は有意なり、惨怛の意多し、惟だ

豺虎鷹鷂より、螭螂蟾蜍の屬に至りて、動を殺して以て生を保す、

馬牛羊豕より、蝶蛾の類に至りて、植を殺して以て生を保す、

人は。則ち動植を得て。之を水火に於て調し。能く其の生を保す。然りと雖も。

其の稟性は。惨怛を愍んで。而して殺の醜事を忌む。

故に本氣は内に保運す、

神氣は外に爲技す、故に

混然たる氣體、動植は同く之を有す、

粲然たる氣體、植は動の用を舍つ、

(PB 215)

(PB 216)